柴田錬三郎
おらんだ左近

集英社文庫

おらんだ左近

1984年12月25日　第1刷
1988年8月30日　第9刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　柴田錬三郎

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋2-5-10
〒101-50
電話　東京（230）6100（編集）
（230）6393（販売）
（230）6080（製作）

印刷　凸版印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©S.Saitō　1984　Printed in Japan

ISBN4-08-750831-5 C0193

庫

おらんだ左近

柴田錬三郎

集英社版

目次

海賊土産……七
仇討異変……四九
江戸飛脚……一〇一
白髪鬼……一七五
暗殺目付……二三八
血汐遺書……二〇〇

解説　武蔵野次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

おらんだ左近

海賊土産

一

街道に、春のほこりが、舞っていた。
そのほこりをさけるために、旅客は、合羽で顔を掩ったり、笠をまぶかにかたむけたりしていた。
風がなければ、明媚の海景色を愛でながら、往く街道である。
備後尾道の、鞆津から阿武音及び戸崎の両瀬戸を経て三原に通じる狭水道を、眼下に眺めわたす坂道であった。
尾道、というのは、山の尾の道、という意味である。
尤も――。
いま、旅客が往来しているのは、足利尊氏がつくった旧道で、本街道は、問屋、市場、廻船着場などがならぶ海沿いにある。
どうしたのか、昨日から、本街道の通行が禁止されて、一般旅客は、山腹を一上一下する

この道を、通らされているのであった。
「ちえっ！　法螺とからっ風は、吹かれる者には、大迷惑だな。ぺっ！　ぺっ！　いい加減にしやがれ」
唾を吐き出して、首を振ったのは、若い職人ていの男であった。
歯ぎれのいい語気と台詞と、小意気な身ごなしで、江戸っ子と知れる。ただの職人ではなさそうである。
と――その折。
背後から、せわしい馬蹄と車輪の音が、ひびいた。
ふりかえった男は、
「おっ！　なんでえ！」
と、目をみはった。
馬車が、非常なはやさで、駆けて来たのである。
馬車。
この時代、京の都には儀式用の牛車がのこされていたが、馬車など、日本全土のどこにもなかった。
男も、生まれてはじめて、眺めるしろものであった。
大八車に似た台に車輪を四つつけて、幌をかけていた。
たづなをとっているのは、黒の着流しの浪人者であった。

もうもうと、ほこりをまきあげて、まっしぐらに突進して来るのをみとめた男は、あわてて、さけようとしたが、あいにく左手は屏風状の岩壁になり、右は断崖になっていた。
岩壁にへばりついていれば、もの凄いほこりを、もろにひっかぶることになる。
「止しやがれ！」
男は、大きく手を振った。
しかし、奔馬は、まるで狂ったように疾駆して来た。
「くそっ！」
男は、いったん、岩壁ぎわに背中をすりつけたが、馬が眼前に来た瞬間、身をおどらせて、その背にとびついた。
その敏捷さは、無類であった。
「とう、とう、とっ、とっ！」
馬は、坂を下った地点で、ようやく、停った。
馬上の男が、ふりかえると、浪人者は、皓い歯をみせて、笑った。
「お前は、職人のくせに、馬術の心得があるとみえるな」
「冗談じゃねえや、旦那――。こんな変てこらいなしろものを作って、往来をつッ走られちゃ、はた迷惑もいいところですぜ」
「お前は、どうせ、たたけばほこりの出る人間だろう。ほこりをかぶるぐらい、気にするな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

そう云われて、男は、一瞬険しい表情になった。
自分より三つ四つ年下で――まだ二十六、七であろう。眉目が秀れているばかりではなく、気品らしいものもそなえていながら、こちらを看る眼光は鋭かった。
まさしく――。二年前まで、江戸で、大名屋敷や札差、問屋の大町人の家を、荒しまわった素走り佐平次という盗賊が、この男の正体であった。
浪人者は、一瞥しただけで、それを看破ったのである。

二

素走り佐平次は、馬から降りると、浪人者の脇に寄った。
「旦那も、只者じゃねえ、とお見受けしましたぜ」
「お前のように、たたけば、ほこりのでる人間ではないことだけは、たしかだな」
「人品骨柄、並すぐれておいでであることは、よく判りやすが……、それにしても、旦那は、一風変った御仁のようだ」
「おれは、べつに変人でも奇人でもないぞ」
「旦那、そばに腰を下しても、よござんすかい？」
「うむ。乗れ」
佐平次は、浪人者の横に、腰を据えた。馬車は、走り出した。
「なるほど、こいつは、便利な乗物だ」

「お前も、そう思うか」
「駕籠にくらべりゃ、こんな調子のいい乗物はありませんや。第一、早えや。雨が降ったって、濡れるのは馬だけだ。こいつは、旦那の工夫ですかい？」
「いや、こういう馬車は、海のむこうの国々では、いたるところ走って居る。走って居らぬのは、この日本だけだ」
「へえ、さいですかね」
「本邦にも、そのむかしは、牛車があった。牛を馬に変えて、車を走らせようと、誰も考えなかったのは、おかしいとは思わぬか？」
「思いやすね」
「牛は車を曳くもの、馬は乗るもの――べつべつに考えて、車を馬に曳かせて、走らせたら、さぞ便利であろう、と思いつかなかったとは、日本人という奴は、よほど、愚直で、融通のきかぬ石頭であったな。そう思うだろう？」
「思いやす」
佐平次は、ちらと、浪人者の端整な横顔を、視やって、
――このさむれえ、やっぱり、只者じゃねえや。
と、微かな畏怖をおぼえた。
次の坂を降りきったところに、臨時の関所が、設けられていて、番士が十人あまり、目を光らせていた。

「旦那、本街道を通行禁止にしたのは、なにかの騒動が起っている証拠ですぜ。……関所が、こんな乗物を、通してくれやすかねえ」

佐平次は、不安な顔つきになった。

「お前はいざ知らず、おれは、べつに悪事を犯して居らぬ。おびえる必要はない」

「百姓一揆でも起って、逃散の百姓を、とっつかまえよう、というのかな？」

佐平次は、首をかしげた。

この備後国は、阿部伊勢守正弘（十万石・福山城主）が領主であったが、きわめて、貧困状態にあった。

隣国安芸は、浅野家で、四十二万六千石の、三百諸侯中でも屈指の太守であり、その城下広島は、京都、江戸、大坂に次ぐ繁栄をみせていたが、この大国でさえも、この天保初年は、農村地帯の窮乏は、他国以上のはなはだしさであった。

寛政の頃、広島藩の学問所に登用された学者吉川南浜は、その著『秋長夜話』に、次のように記している。

『広島の繁華は、三都の外比肩すべきところなし。ゆえに、ひと通り見るところにては、富国と見ゆれども、実に、貧困なり。その本、窮して、その末、奢れるなり。……それ他国とても農民の富有なるはすくなけれども、予が足跡の及ぶところもて、うかがい見るに、この国ほど農民の貧困なるはなし』

宝永以来、広島藩は、しばしば、百姓一揆が起って、藩庁は、その鎮圧に、なやまされつ

づけて来た。
広島城下に、一月ばかり逗留していた佐平次も、百姓たちが、村をすてて、瀬戸内海の島へ、逃散している、という噂を耳にしていたのである。まして浅野家の四分の一の領地の福山藩が、どれくらい貧乏か、およその想像がつこうというものである。
「百姓の逃散ぐらいで、関所は設けぬ」
浪人者は、そう云いすてておいて、馬車を進めた。
番士たちが、一斉に、奔って、馬車を包囲した。
浪人者は、微笑しながら、
「なんのお取調べかな！」
と、番士たちを見まわした。
「降りろ！」
「さあ、どうするかな」
「手向えば、くくるぞ！」
「うしろの荷を調べるのなら、こちらは、降りることもあるまい」
台には、かなりの荷が、積まれてあった。
番士たちが、それらを、乱暴に、地面へひきずりおろそうとすると、浪人者は、
「鄭重にとりあつかって頂きたいな。箱の中身は、爆薬で、うっかり落したりすると、お手前がたは、木っ葉みじんだ」

「な、なにっ?!」
「というのは、嘘だが、貴重な品物が納めてあることは、まちがいない」
番士たちは、箱の中をのぞいて、見たこともない機械や容器が入っているのを、見出して、顔を見合せた。
「これを、どこから、運んで参った?」
険しい視線を集中された浪人者は、
「長崎から、はるばる――」
と、こたえた。
「いつわりを申すな。この尾道で、ひそかに、船から荷揚げいたしたのであろう?」
「ははあ、お手前がたは、これを外国からの密輸入の品だ、と疑って居るのだな。……そういえば、この尾道の湊は、そのむかし、明国はじめ、朝鮮、東京、柬埔寨、呂宋などに往来した海賊船が、本拠としていた、ときいたことがある。お手前がたが目の色を変えているところをみると、いまでも、抜荷（密貿易）船が出入りしているのだな。それとも、浅野家が公儀に内密に、密貿易をやっているというのかな」
浪人者の歯に衣をきせぬ言葉が、番士たちを激怒させた。

三

番士たちは、抜刀するや、

「降りろ！」
「奉行所に、ひっ立てるぞ！」
と、叫びたてた。
浪人者は、微笑すると、佐平次に、そっとささやいた。
「おれが、降りたら、お前は、かまわず、おれに代って馬を走らせろ。よいな。たのむぞ」
「へ、へえ」
なにがなんだか判らぬままに、佐平次は、承知した。
この若い浪人者には、さわやかな男の魅力があったのである。
それにしても――。
まっしぐらにつッ走れば、この国の領主が住む福山城下に至る。
逃げかくれる余地は、なさそうである。
浪人者が、どういう思案を胸中に抱いているのか、佐平次には、見当もつかなかった。
見当もつかないながら、そこは、生死の瀬戸を幾度となく、くぐり抜けて来た図太い盗賊であった。
なんとなく、
――面白えことになったぞ！
と、血がわいた。
浪人者が、地面に降り立つや、佐平次は、わざと、ひっくりかえると、馬の尻を蹴とばし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor